

略本詠歌一体の諸本と成立

佐藤 恒雄

一 はじめに

広本（甲本）詠歌一体に比べて量的に簡略な種類の伝本を一括して、「略本詠歌一体」と呼ぶことにする。略本すべてに共通する特質は、広本（甲本）中の「主ある詞」を中核として形成されている点にあり、形態・内容・奥書などの点から見ても、広本以後の成立である。

略本の伝本はすこぶる多く、それらを截然と系統づけ、それによって成立を跡づけることは難しい問題であるが、できるだけ具体的に諸本のありようを追尋し、可能なかぎりその解答に近づくことを、本稿の課題としたい。

二 略本詠歌一体の諸本

略本詠歌一体の、構成要素と構成形態、奥書ならびに内容の

特徴などを大まかな基準として分類すると、次のように五類に分かたれる。

第一類 a ①島原市図書館蔵松平文庫「定家卿筆作禁制詞」

（「歌書統集」〈一一九・七〉所収） A 45

b ②叡山文庫蔵「定家卿筆作禁制詞」（真如蔵・七六・

三二） A 45

第二類 ③慶応義塾大学図書館蔵（一四一・四八）「禁制詞」

B 43

④島原市図書館蔵松平文庫（一一七・四六）「和歌制詞」 C 41

⑤彰考館文庫蔵（巳・二〇）「詠歌一体制詞歌」（東野州聞書」と合綴） C 42

⑥宮内庁書陵部蔵（五〇一・八六四）「詠歌制之詞」

C 46

⑦早稲田大学図書館蔵「詠歌一体制詞歌」 D 43

⑧久曾神昇氏蔵「詠歌一体云制詞」（「雨中吟」を後付）

(巻尾四首欠)

D 43

⑨ 国立国会図書館蔵 (わ九一・一〇一・一二二) 「詠歌一体制詞歌」 (和歌十体) 他と合綴 A D 45

⑩ 陽明文庫蔵 (二四四・三三三) 「制詞」 (和歌抄類聚) の内 D 42

第三類 (丙本)

⑪ 広島大学国文研究室蔵 (二七九七) □□□□^体 制詞歌「(老談)と合綴」 C 42

⑫ 東京大学国文研究室蔵「制詞」 D 42

⑬ 東洋文庫蔵 (三・Faへ・一〇二) 「詠歌一体」 B 44

⑭ 慶応義塾大学図書館蔵 (一一六・四七) 「詠歌一体」云「(群書)所収」 C 44

⑮ 宮内庁書陵部蔵 (一一五・三八二) 「詠歌一体」 (莫伝抄)と合綴 C 44

⑯ 陽明文庫蔵 (近二四四・三三二) 「詠歌一体」 (万葉草木鳥虫異名) 他と合綴 C 44

⑰ 彰考館文庫蔵 (巳・二二) 「詠歌一体云有主詞」 (竹園抄)と合綴 43

⑱ 彰考館文庫蔵 (巳・二二) 「ぬしある歌の事」 (竹園抄)と合綴 C 47

第四類

⑲ 広島大学国文研究室蔵 (三二二〇) 「先達加難詞」

⑳ 島原市図書館蔵松平文庫 (一一九・六) 「先達加難詞」 (歌書集) 所収

第五類 (乙本)

第一種 【大永二年堯空奥書系】

㉑ 『群書類従』 卷第二百九十二所収「詠歌一体」 D 42

㉒ 中田光子蔵「詠歌一体」 (半紙本) D 42

㉓ 名古屋大学附属図書館皇學館文庫 (皇W九一・一〇四・R) 「詠歌一体」 D 42

㉔ 今治市河野美術館蔵 (三三二・六四四) 「詠歌一体」 D 42

㉕ 龍谷大学附属図書館蔵 (九一一・二〇七・一三・一一) 「詠歌一体」 D 44

【大永二年堯空奥書+天正十七年也足子奥書系】

㉖ 京都大学図書館蔵中院本 (中院・VI・二二) 「詠歌一体」 D 42

㉗ 京都大学図書館蔵清家文庫 (四・二二・エ・二二) 「詠歌一体」 D 42

㉘ 陽明文庫蔵 (近二四四・二二四) 「詠歌一体」 D 44

㉙ スエーデン王立図書館蔵 (二六七・七・六) 「詠歌一体」 D 42

㉚ 宮内庁書陵部蔵 (伏・六二) 「詠歌一体」 D 42

第二種【無奥書系】

- ③①天理図書館蔵(九一一・二・四九五)「詠歌一体」 D 42
- ③②筑波大学附属図書館蔵(ル二〇五・一〇七)「詠歌一体」 D 42
- ③③歴史民族博物館蔵高松宮本(七七)「制詞」 D 42
- 【大永二年堯空奥書+天正十九年也足子奥書系】
- ③④宮内庁書陵部蔵(四〇五・一八五)「詠歌一体」 D 42
- ③⑤神宮文庫蔵(三・一一一)「詠歌一体」(同) D 42
- ③⑥名古屋市鶴舞図書館蔵(河エ・四)「詠歌一体」 D 40
- ③⑦宮城県立図書館蔵伊達文庫(伊九一一・二〇七・二)「詠歌一体」 D 45
- ③⑧岡山大学附属図書館蔵池田文庫(P九一一・三五)「詠歌一体」(「歌学叢書二」の内) D 42
- ③⑨天理図書館蔵(九一一・二・四九五)「詠歌一体」(日野資枝刊本) D 42
- (書陵部蔵〈葉・四六九〉本他も)
- ④⑩歴史民族博物館蔵高松宮本「詠歌一体」(後水尾院宸翰) D 42
- ④⑪天理図書館蔵(九一一・二・タ五)「詠歌一体」

第三種

- ④⑫宮内庁書陵部蔵(五五三・一五・九)「詠歌一体」 D 42
- ④⑬中田光子蔵「詠歌一体」(横本) D 44
- ④⑭園部市教育委員会蔵小出文庫「詠歌一体」 D 42
- ④⑮白杵市白杵図書館蔵「詠歌一体」 D 42
- ④⑯金沢市立図書館蔵藤本文庫(〇九六八・四)「詠歌一体」 D 42
- ④⑰京都大学附属図書館蔵平松文庫(平松七門・キ・七)「詠歌一体」(「近代秀歌」と合綴) D 44
- ④⑱宮城県立図書館蔵伊達文庫(伊九一一・二〇七・三)「詠歌一体」 D 42
- ④⑲陽明文庫蔵(近二四三・四〇〇)「詠歌一体」 D 42
- ④⑳陽明文庫蔵(三二九・一六)「詠歌一体」 D 42
- ④㉑陽明文庫蔵(二四三・四〇〇)「詠歌一体」 D 42
- ④㉒叡山文庫蔵(毘沙門堂・三三・二八二)「詠歌一体」 D 42
- ④㉓彰考館文庫蔵(巳・一八)「詠歌一体」(「近來風体抄」他と合綴) D 42
- ④㉔彰考館文庫蔵(巳・二二)「詠歌一体」(「了俊不審条々」他と合綴) D 42

⑤⑤ 国立国会図書館蔵（二八一・二八〇）「小点和歌」
C 42

三 第一類の諸本

第一類①松平文庫本は、略本中でも最も簡略な種類の本で、冒頭に「時しもあれ」「ここちこそすれ」「物にぞありける」「ものなれや」「吹あらしかな」「つゆの夕ぐれ」「くもるるかせ」「しろき」「あをき」「み山辺のさと」の一〇語を列挙、次に「春かすみかねたる 家隆朝臣 うつるもくもる 具親」以下、「主ある詞」とその「作者」を列記して、最後「なみにあらずな 三位入道 以如御本写之」まで、広本『詠歌一体』の「主ある詞」四五語（二条家系統本のこととその数）とその「ぬし」を示してゆく。そして、堯孝が書写時に付したと思われる後文、此一冊御本のままうつしたてまいらせ上候。不審の所々にしるしをつけ候。作者などかき様もをほつかなく存候。又もれたる事ともあけてかそへかたく候。およそこれらの詞の事一流に条々申置く子細候。口伝云「代々宗匠不庶幾て被申たる詞ともあり。（以下「井蛙抄」第三冒頭の一文を用）」遺訓にまかせてこれをまもりこれをつつしむへしと云々。これにつゐて秘伝あり。故実あり。能々可得御意候哉。

があつて、

文安五年八月日 法印

右堯孝以御筆かさねて是をうつし申／ものなり

慶安二年卯月日

との本奥書と書写奥書がある。文安五年の堯孝筆本を、慶安二年（一六四九）に某が転写したものと知れる。後文中の「二流」は、頼阿『井蛙抄』の引用といい、「主ある詞」が二条家系統広本の四五語に一致することからも、「二条流」であることは間違いない。後述するとおり、第二類本と三類本は冷泉家系統の「主ある詞」四三語を基本とするのに対し、二条家系統本文を基礎とするこの第一類は第四類本へとつながってゆく。書名の「定家卿筆作」には特に根拠があると思えない。この本の成立は、少なくとも文安五年（一四四八）八月、堯孝以前にまで遡り、上限は、為氏奥書本広本（甲本）『詠歌一体』が成立した、建治二年（一二七六）十一月十一日以後と括ることができる。

なお、略本すべての基本構成要素となる「制詞歌」に関しては、「空さへ句ふ」の例歌と作者の比定においていくつかの類型があり、分類の指標とすることができる。すなわち、次の四つの場合である。

A 空さへにはふ

権大納言

B よしの山花のさかりや今日ならん空さへ句ふみねの白雲

俊成

C よしの山花のさかりや今日ならん空さへ匂ふみねの白雲

守覚法親王

D 花ざかり春の山辺をみわたせば空さへ匂ふ心地こそすれ

後二条関白

Aは『新古今和歌集』（春下・一〇三）の権大納言長家の歌、

花の色にあまざる霞たちまよひ空さへ匂ふ山ざくらかな

を念頭に置くもの。BとCに関しては『守覚法親王家五十首』

の歌で、作者は俊成が正しいが、守覚法親王の歌と誤ってし

まったのは、『続拾遺和歌集』（春下・七五）から引用したとき、

「守覚法親王家に五十首歌よみ侍りける時」とある詞書だけを見

て即断してしまったためである。従って、Cとする本は、『続拾

遺和歌集』（弘安元年〈一二七八〉十二月二十七日奏覧）が上限

となる（ほとんど有効ではないが）。この指標を①本にあてはめ

検してみると、中に「そらさへにほふ 権大納言」とあるので、

この本がまさしくAであることを知る。御子左家の曩祖長家の

歌を比定したのは、この本のみで、それは二条流の比較的早い

段階における所為として了解できるであろう。この指標につい

ては、記号をもって先の諸本分類一覧中の末尾に記し、歌数も

あわせ示した。

②の叡山文庫本は「定家卿筆作禁制詞」の外題（と内題）で、

①本とまったく同系の本を前半に収め、後半に「先達加難詞」

（一二九語）が付加された写本である。巻首扉に「浄教房 真如

藏」の書付け、巻尾に次の奥書がある。

本云／応永十三年七月廿日以家本令／書写畢／（二行空白）

元禄九年九月二日令一校畢／写本者萬殊院宮御本也／

校讐権大僧都実顕／筆者権律師万證

応永十三年（一四〇六）の書写者は不明であるが、このころす

でに第四類本にはほぼ等しい「先達加難詞」を付加した形態の本

が成立していたことが判る。①本の文安五年（一四四八）より

も四十年も遡る時期である。「主ある詞」は、二条家系統本に独

自の「雪のした水」「こがらしの声（風）」「我のみけたぬ」「み

だれてなびく」（冷は「絶間になびく」）の四語があり、冷泉家

系統本独自の「雪の夕暮」一語はあるものの、基本的に二条流

の本文が基礎になって（若干の混態がはじまってはいるが）い

る点でも、前半の「定家卿筆作禁制詞」の素性と整合性がある。

四 第二類の諸本

第二類本は、「制詞歌」のみから成る諸本で、冷泉家系統本の

「主ある詞」四三語を含む「制詞歌」四二首を基本として列挙、

合点により、もしくは別掲してその詞を示し、作者名を添える

のを基準とする形態の本である。四三語が四二首となるのは、

「あやめぞかほる」「雨の夕ぐれ」の二語を含む歌として、「新古

今和歌集」夏・二二〇・良経の、

うちしめりあやめぞかほる時鳥なくや五月の雨の夕ぐれ
一首を挙げることによる。広本「主あることば」が本来意図していたのは、この歌一首であったと思われるのであるが、一語に一首をあてる原則のようなものが意識されて、四三首が揭示されるようになり、その場合は、「雨の夕ぐれ」の例歌として、「玉葉和歌集」一四七二・永福門院の、

つねよりも涙かきくらすをりしもあれ草木を見るも雨の夕ぐれ

が宛てられる。従って、この歌を持つ本は、「玉葉和歌集」が成立した正和元年（一三二二）三月二十八日以後の成立ということになる。また、四四首が揭示されることもあり、その場合は冬の部の最後に「木がらしの風」一語を加え、「新古今和歌集」冬・六〇四・雅経の、

秋の色を払いはててやひさかたの月の桂に木がらしの風が宛てられる。元来この「木がらしの風」は「月の桂に」と続けて二条家系統本に固有の詞であって、如何にしてかは不明ながら、冷泉家系統本の四十三語四十二首を基本とする中に、二条家系統本文が混入し混態が生じはじめているとみえる。

さて③慶応義塾本のみには、冒頭に①本の一〇語を収め、歌は四三首（雅経歌「秋の色を」がある）。巻尾に、
為遣赤松兵部少輔殿染患筆訖

延徳二年拾月廿八日／ 宋世（花押似書）

と奥書があつて、延徳二年十月二十八日に、飛鳥井宋世（雅康。雅世の二男。榮雅弟）が、播磨国の守護赤松民部少輔政則に書写して与えた本であつたことが判る。「制詞歌」のみからなる二類本は、少なくとも延徳二年（一四九〇）以前には成立していたと知れる。「空さへにほふ」の例歌はBで正しいが、類例は少なく、他には三類の⑪本しかない。

④松平文庫本は、歌数は四一首。「龍田山あらしや峰によわらん渡らぬ水も錦たえけり」（宮内卿）の一首が足りないので、機械的な欠脱であろう。

⑤彰考館文庫本は、歌数四二首。

文明式年十月廿八日依所望書写之者也、家之本云々、雖然於有誤者可被改之、銘巫

との書写奥書があり、書写者「銘巫」については未詳ながら、文明二年（一四七〇）以前にこの「制詞歌」は成立していたことが判る。

⑥書陵部本は、以下の内容を持つ特異な本である。

i 「あやめぞかほる」の語を欠き、「雨の夕ぐれ」の例歌は「うちしめりあやめぞかほる」の一首（良経）のみを揭示。

ii 「雪の玉水」の語（二条家系統本の独自語）があり、式子内親王「山ふかみ春ともしらぬ松の戸に絶えだえかかる雪の玉水」の歌を掲げる。

iii 「色なる波に」の例歌は、俊成の「明日もこん」の一首のは

かに、「玉川の岸の山吹かげ見えて色なる波にかはづ鳴くなり」(後鳥羽院)を掲げる。

iv 末尾に、「嵐も白き」「べらなり」の二語を加え、後鳥羽院の「みよしのの高嶺の桜ちりにきや嵐も白き春のあけぼの」と、貫之の「山高み見つつ侘びこし桜花風は心にまかすべらなり」の歌を掲げていて、総計四五語四六首から成る。

冷泉家系統の本文を基礎としながら、二条家系統本文との混態がはじまっている。

⑦早稲田大学本は、四三首(永福門院「常よりも」歌がある)の歌を収め、

此本招月庵正徹自筆之本を以、明暦三年八月十八日文字不違写之者也

との書写奥書がある。書写した人物は不明であるが、伝正徹自筆本が明暦三年(一六五七)のころまで存在していたことが確かめられる。「空さへにほふ」の例歌は、Dである。

⑧久曾神昇氏蔵本は、「雨中吟」を後付する卷子本(冊子本改装)で、伝牡丹花肖柏筆。「詠歌一体云制詞」の内題下に「制詞合点」と注記するとおり、上下句二行書きの歌に合点を付して制詞を示し、歌の末尾に作者名を添え、歌頭に集付を付している。惜しむらくは最末部の一丁分が欠脱して「旅」の四首が見えず、「雨中吟 十五首」に連続している。「空さへにほふ」の例歌は、Dである。

⑨国会図書館本は、歌を部類ごとに作者別に配列編成替えした本で、永福門院の「常よりも」歌があり、「空さへにほふ」の例歌は二首(後二条関白「花ざかり」権大納言長家「花の色に」、「色なる浪に」)の例歌も二首(俊頼「あすもこん」後鳥羽院「玉川の」)を掲げ並べているので、あわせて四五首から成る。

⑩の陽明文庫本は、歌数四二首。これも「空さへにほふ」の例歌は、Dである。

以上の第二類本の成立の上限は、冷泉家系統「主あることば」の四三語が基礎となっているので、為秀が冷泉家の家の証本を確立した、貞和三年(一三四七)三月二十九日(延文元年(一三五六)正月二十八日の間(為秀の「右近権中将」時代)以後となる。

なお、『耳底記』(慶長三年、一五九八)付載(烏丸光広別記)の「詠歌制之詞」も、形態上はこの第二類の変型と言える。

五 第三類の諸本

第三類本は、従来これを丙本と称してきた系統の本で、「制詞歌」と「不可好詠詞但用捨之」「栗田口大納言基良卿被注送草云」の三部分から成る。「制詞歌」は各ことばと作者名を一行に書き、歌は別行に一行または二行書きの形態で書写されるのが基本で、「主あることば」には前文と後文が付随する。すなわち、

前文は内題下に「此ごろ人のよみいだしたらんことば、さらさらよむべからず」と割注の形で示され、後文は「か様の言葉、主あることなれば詠むべからず。古歌なればとて、人のひとり詠じいだして我が物と持ちたるをば取らずと申すめり。桜散る木の下風など様なることは、昔の歌なればとて取ること僻となるべしと識めたれば、必ずしもこの歌に限るべからず。一首の詮にてあらん言葉、ゆめゆめ思ひよるべからず」とある。四二首の上に、「雨の夕暮」の例歌として永福門院「常よりも」歌、「木枯らしの風」の例歌として雅経の「秋の色を」歌を加えた四四首が基本の数である。そして「制詞歌」が終わった後に、「不可好詠詞但用捨之」(俊成卿・定家卿・為家卿等、代々歌合被嫌詞也) (五七語)「栗田口大納言基良卿被注送草云」(七語)が付載される。^⑬本をはじめとしてほとんどの本の奥に、

本云

或世許而不為難、或人忘而更用之、猶僻案者不甘心

とする識語があるが、^⑭の広島大学本には、この識語のあとに、「招月迷路者」の署名があつて注意される。すなわち、

或世許而不為難、或人忘而更用之、猶僻^{案者}□□^不甘心候、招

月／迷路者 在判

とある。「招月迷路者」は正徹の跡を継いだ正広であるといふ。^(注2)

この本は、一般の三類本に至る直前の一段階に位置するらしく、最初の「制詞歌」の部分は、歌一首と作者名を一行に書き連ねる形式で、歌数が四二首である点を除けば他の本と変わらない

が、その次の「不可好詠詞但用捨之」(俊成卿・定家卿・為家卿等代々歌合被嫌詞也)の部分は、「春の夕暮」「秋の明ほの」以下「谷こし」「うきかうき」に至るまで、全部で三九語しかない。しかも、その標題に続く部分は、「^無□□^子□□^細□□^詞合点了」と標題を一行どりで記したあとに、「春の夕暮・秋の明ほのなど云事・まゝ・そ、や・夜すから・ふるやあられ・人こころ・うつや衣のやの字・景色」の九語が列記され、さらに「聊有許方詞二合小点也」と一行どりで標題を記して、「ゆかしき」「雪の明ほの」以下「べらなりなど云詞」まで一九語が列記される。そして、「自是不引本歌」とまた標題を記して、「雨のゆふ暮」以下「うきかうき」まで一一語が記され、先の「招月迷路者 在判」の奥書に続いている。この形態は、^⑮東京大学伝正徹筆本と同じで、東大本は「不可好詠詞」の途中から以下を欠くが、他の本で「紅葉しにけり」の下に割注の形となっている「無子細詞合点畢」を改行して「春の夕暮」→「けしき」の見出しとし、その一二語に朱点があり(朱点は「紅葉しにけり」までの一〇語にもある)、また「けしき」の下に「聊有許方詞二合小点也」も、次の「ゆかしき」以下「雨の夕暮」までの見出しとされている。「雪の曙」「こなた」「おほかた」の三語に朱点がある。そしてその次に又改行して「自是不引本歌」と記したところで終わっている。ただこの本は、「制の詞」も広本「主ある詞」の順序に並べる通例によらず、四季・恋・雑の、各類内で作者別に部類する

形態を取っている点で、先の広大本とは異なっている。東大本の歌数は四十二首、「空さへ匂ふ」の例歌は、Dである。広大本は、通例の三類本「不可好詠詞但用捨之」よりも少し早い一段階の集成であると思われる。かくて、三類本の成立も、正広（応永十九年（一四一二）〜明応二年（一四九三））以前に遡り、『玉葉和歌集』成立の正和元年（一二三二）三月二十八日以後と、その範囲を括ることができる。

「不可好詠詞」五七語には、排列上『為家口伝』（和歌口伝抄）とも）の末尾や慶融の『追加』と一致する部分があり、これら三書の間は何らかの関連があると見られる。またこの「不可好詠詞」は、宗長の『永文』冒頭にも収められており、この種の本が連歌師たちの間に広く流布していたことを窺わせる。

⑬東洋文庫本は、歌数四十四首、「空さへ匂ふ」の例歌は、Bである。『歌論集一』（三弥井書店、昭和四十六年二月）の「詠歌一体」（丙本）の底本とされる。

⑭慶応義塾本には、右の奥書（「或世許而不為難」云々）のあとに、

右一冊者申出冷泉民部卿家之本（筆者藤原孝範）令書写畢

桑門偃月 判

とあり、孝範の手を経た本であったことを知る。

⑮書陵部本は、「制詞歌」四四首（合点四二首）、「不可好詠詞」六五語、「粟田口大納言基良卿被注送草」云七語から成り、

奥に、

此一冊以勅本雖書写有不審／数多重以類本可勘合者也／

寛永四年八月十九日／李部

とある。寛永四年（一六二七）智仁親王筆本からの転写本である。

⑯陽明文庫本は、歌数四十四首、「空さへ匂ふ」の例歌は、Cである。

⑰彰考館本は、前文と後文はあるものの、「制詞歌」の部分が歌ではなく「主ある詞」四三語をならべている点で、特異である。

⑱彰考館本は、四二首の後に、「山ふかみ春ともしらぬ」（式子）「花ざかり春の山べを」（後二条閑白）「桜花空さへにほふ山風に」（兵部卿成実）「玉川の岸の山吹かげ見えて」（後鳥羽院宮内卿）「秋の色をはらひはててや」（慈鎮）の五首を列記して、合計四七首。前文はなく、後文も「右のぬしぬしある詞よむべからず」のみで、簡略化されている。「空さへ匂ふ」の例歌は「吉野山花のさかりやけふならん」同（殷富門院大輔）と作者を誤記しているが、Cのバリエーションではある。

六 第四類の諸本

第四類本は、「制詞歌」を持たず、「主ある詞」四一語を含む「先達加難詞（并ぬしあること葉の内／先達難之条々）」一三六語（⑳本は一三三語）と、一行の余白もおかず連続して記され

る「一つ書き」部分三四か条(②本は三三か条)とから成る本。一つ書きの条々も「先達加難詞」の内題下に統括されて、構造的にその一部をなしている本である(これまで、詞単位の加難の部分と一つ書き部分を分離したものと考えてきたが、認識を改めたい)。すでに見たとおり、「主ある詞」は、二条家系統本に独自の「雪のした水」「こがらしの声(風)」「我のみけたぬ」「みだれてなびく」(冷は「絶間になびく」)の四語があり、冷泉家系統本独自の「雪の夕暮」一語はあるものの、基本的に二条流の本文が基礎になって、若干の混雑がはじまっていると見られる。とすれば、第一類本から第四類本へと繋がる系譜が認められることになる。

⑬ 広島大学本は、奥に次の授与奥書がある。

建武五年後七月十三日拾遺／三品為親卿授与之訖。当／道之亀鏡也。

さらに、次の丁に本文と同筆で、

元文二年五月十七日於／江府自平山氏授／受之書写訖。／

充直(花押)

と書写奥書がある。建武五年閏七月十三日に為親から授与された本からの転写本ということであろう。為親は為氏の玄孫、為世の孫にあたる歌道家の人で、二条家流の本文を基礎としているという事実に符合している。この本は少くとも建武五年(一三三八)七月十三日か、それ以前にまで遡ることができよう。

成立の上限は、為氏奥書本広本(甲本)『詠歌一体』が成立した、建治二年(一二七六)十一月十一日以後となる。

建武五年といえ、広本(甲本)もまだ初期の段階で、写本として世に存在していたのは、建治二年の為氏奥書本と為秀若年の筆になる河野本の二本のみ(嘉元の頃の為相本は架空の本で実在しなかった)で、「右近権中将」時代(貞和三年(一三四七)三月二十九日～延文元年(一三五六)正月二十八日)の為秀が、冷泉家の家の証本として確立した冷泉家時雨亭文庫現蔵『詠歌一体』もまだ出現する以前であった。その時期においてすでに、「先達加難詞(并ぬしあること葉の内／先達難之条々)」の言葉が集成され、一つ書き部分が広本(甲本)「詠歌一体」や「宗尊親王三百首」その他から抜き出されていたとすれば、四類本の成立は随分と早く、広本(甲本)「詠歌一体」と踵を接するようにならなければならない。

諸所に蔵される「隆源口伝」合綴の「先達加難詞」も同種の伝本である。なお、この広島大学本「先達加難詞」の詳細については、井上宗雄・佐藤恒雄稿を参照されたい。^(注3)

⑭ 島原松平文庫本には、奥書はなく、内容に若干の出入りはあるが、基本的に⑬広島大学本とほぼ同じである。

七 第五類の諸本

第五類本は、これまで乙本と呼称されてきた系統の本で、「詠歌一体制詞歌」と「先達加難詞」（前半は詞単位の規制、後半は「二つ書き」形式の規制）の整然とした二部構成となっている。第一部「制詞歌」の部分は、冷泉家系統の制詞歌四二首（四三語）を基本とし、前文「このごろ人の詠みいだしたらむ言葉、さらさら詠むべからず」と後文「か様の詞は、主ある言葉なれば詠むべからず。古歌なりとも人ひとり詠じいだして我が物と持ちたるをば取らずと申すめり。桜散る木の下風・ほのぼのと明石の浦などの、様あることは、昔の歌なればとて取ること僻ことなるべしと誡めたれば、必ずしも此の歌に限るべからず。一首の詮にてあらん言葉をば、ゆめゆめ思ひよるべからず」（広本「詠歌一体」の文章をほぼそのままに引く）を前後に配置して、広本（甲本）「詠歌一体」の「歌の詞の事」（主ある詞）の部分の基本となっていることが示される。この点で第三類本（丙本）の「詠歌一体制詞歌」も同じであるが、その形態が三類本のそれ（各ことば・作者・歌一首）よりも簡略で、その詞を詠んだ「主ある歌」一首を掲示する形で示され、合点によって「主ある詞」を示し、歌の作者名は記されない。「空さへ匂ふ」の例歌はDの「花ざかり春の山辺をみわたせば空さへ匂ふ心地

こそすれ」で、これは五類本の諸本すべてに共通する。第二部の「先達加難詞」は、前半には、春・夏・秋・冬・恋・雑に部類したことは単位の加難詞一〇〇語を列記し、間をおくことなく「二つ書き」形式の加難条々が二七か条掲げられている。略本の諸本の中では、簡潔にもっともよく整えられた本である。

第一種本のすべては、桑門堯空の奥書を持つ。

此小冊馳惠筆授与斎藤宗甫、々々者知己四十年來、而今予衰老不知旦暮、他日為陳跡披之者、須令哀憐而已

大永第二仲冬下澣 桑門堯空

堯空は三条西実隆入道である。伝写本の数もすこぶる多く、乙本の大半はこの系統の本で、調査の及んでいないものや個人蔵のものを含めれば、さらに龐大な数にのぼる写本群となると思われる。日野家蔵の本が板行された（^{注4}39本）が、これは写本に見紛う形態の本で、一般の板本のように流布しなかったらしい。しかし広本（甲本）「詠歌一体」は収載されてないのに、この乙本が「詠歌一体」の書名で『群書類従』に収められた（^{注4}21本）ことが、広範な流布を促したと思しく、略本中では最も流布した種類の本であった。関連諸本の奥書を付記する。

②3皇學館本は、江戸後期の新しい写本であるが、堯空奥書の後に、

右写本者逍遙院真跡也。奥書之大永第二者正当壬午、今年又同。聴雪寿算六十八歳、予亦六十九歳余、齡聊相類。雖

然才芸筆力隔穹壤、頗沐猴而冠耳歟。近曾因日野黃門芳命
 凌老眼於閑窓染禿毫於凍硯、以不違一字而汚猪国併招後日
 之嘲者乎。仰異来誓清書而已／

權中納言兼成

龍集天正壬午冬至前十日／元文元年季冬 度会常彰

と水無瀬兼成の識語がある。堯空真跡奥書本は兼成が伝え所持
 していたと判り、日野資枝の命を受けて写本を作ったことを伝
 える内容であろう。関連諸本の奥書を付記する。^(注5)その所持する
 堯空三条西実隆真跡本を借りて、中院通勝也足子が写しを作製
 した。

すなわち、⁽²⁶⁾京大中院本、⁽²⁷⁾京大清家本には、大永二年堯空
 奥書の後に、

右奥書之正本備請水無瀬中納言兼成卿／不違一字卒終書写
 之功則遂校合加／朱点訖。尤可為証本、深秘函底勿／出窓
 外耳／

于時天正第十七仲春下六候 也足子（花押）

と、通勝による天正十七年二月二十六日の書写奥書があり、そ
 の本が転写されて、⁽²⁸⁾本⁽²⁹⁾本⁽³⁰⁾本⁽³¹⁾本⁽³²⁾本⁽³³⁾本の写本が伝存す
 ることになった。関連諸本の奥書を付記する。^(注6)

通勝はまた、実隆筆本からの天正十七年写しを自家の証本と
 し、転写して所望の仁に与えることもあったようだ。すなわち、
⁽³⁴⁾本には、大永二年の堯空奥書の後に、

以右之奥書本、不違一字卒写之、／是依幸賀公所望也。可

為証本、莫／免外見矣／

天正十九年春季中旬 也足子（花押）

と同じ也足子による二年後三月中旬の書写奥書があるからであ
 る。幸賀公は細川幸隆（後の妙庵）で、幽斎の三男。この年二
 十一歳であった。この本は『歌論集二』（三弥井書店、昭和四十
 六年二月）所収「詠歌一体」（乙本）の底本とされる。その本が
 転写されて、⁽³⁵⁾本⁽³⁶⁾本⁽³⁷⁾本⁽³⁸⁾本の諸本が残された。関連諸本の
 奥書を付記する。^(注7)

第二種としたのは、以上述べ来たった三条西実隆堯空の奥書
 も、中院通勝也足子の奥書も持たない諸本（その他の書写奥書
 や識語がある場合は若干ある）を便宜的にまとめ並べたもので
 ある。本来あった奥書を省略して書かなかったものも少なく
 ないであろう。これら一群の写本も、冷泉家系統の四二首の「制
 詞歌」と「先達加難詞」（詞と一つ書き条々）を基本とする点に
 おいて、第一種の諸本と何ら変わるところはない。

⁽³⁹⁾天理本（刊本）には、奥に河村殷根の筆による以下の識語
 がある。

右詠歌一体、日野資枝卿為亜相之時潤毫、命弟子某令手刻
 所賜也。

寛政五年七月 殷謹記

また、⁽⁴¹⁾天理本には、次の奥書がある。

此一冊日野前大納言資枝卿より／伝授之本也他見不可有候

寛政十一歳末八月廿八日／渡辺綱光謹写（花押印）

また、書陵部蔵（一五二・一七）「詠歌一体」は、資枝による「詠歌一体」（乙本）の註解で、奥に「此一冊依傳陸公仰註進／安永六年十二月 資枝」とある。これらのことから窺えるように、日野資枝は「詠歌一体」（乙本）の書写のみならず、研究にまで深く関わった篤志の仁で、それが高じて写本をそのまま刻した板本を作製し、諸家に配布寄贈するような奇特な行爲をしたのであった。関連諸本の奥書を付記する^{（注8）}。

第三種とした^⑤国会図書館本は、まず作者別に部類した「制詞歌」四二首を掲げる（前文と後文はなく、改編にあたり省略されたものと見える）。作者別に部類する形態の本としては、^⑨国会図書館本^⑫東大本などがあるが、少数である。「空さへ匂ふ」の例歌は、Cの「よしの山花のさかりや今日ならん空さへ匂ふみねの白雲 守覚法親王」で、第一種・第二種の諸本がDの「花ざかり春の山べをみわたせば」（後二条関白）であるのは異なり、第三種の「制詞歌」に近いところがある。続いて「先達加難詞（新古今以来代々禁制之詞等也）」（九二語の詞と一つ書き三〇か条）を掲げ、奥に、

右小点之通於詠歌諸家用之、此等之詞毎度令禁制／
訖、常以握翫而宜以慰給者也、乍去輒不可有他見而已／

土州 一条後葉桑門尊俊（花押似書）

とある。尊俊は、土佐一条家に連なる室町期の僧侶歌人で、大永・享祿・天文ころ（一五二一―一五五五）に事跡がある^{（注9）}。

以上、基本的にはほとんど一系である五類本諸本のありようから推考してみると（もとより末流本の乱れは様々にあらわれてはいるが）、五類本の始原は、三条西実隆堯空の大永二年（一五二二）十一月下旬書写（授与齋藤宗甫）本に行き着くであろう。「制詞歌」は、二類本ではそれだけが構成内容であつたし、三類本の基幹構成要素でもあつたから、実隆の手柄はそれらを承けて形式を最もシンプルに整えた点に認められる。「先達加難詞」については、四類本の「先達加難詞（并ぬしあること葉の内／先達難之条々）」を承けて、前半の「ことば」単位の加難詞の中から「主あることば」を「制詞歌」の方に移動させて残りを整理し（それでも「雪の下水」「露の底なる」「雪の夕暮」「我のみけたぬ」「我が身にけたぬ」「渡らぬ水も」の六語は残り重複してしまつた）、「一つ書き」形式の加難の条々も条項の数と記述内容を減らして整理しシンプルで明快な内容とした点に、その功績を認めてよいであろう。実隆以前の誰かがすでに完成していた祖本があつて、実隆はそれを書写しただけという関係は、甚だしく想定困難である。

八 略本流布の時代

以上、略本詠歌一体の諸本を蒐集して、便宜的・形式的な分類を施し、記述しながらその成立の問題を追究してきた。その結果として得られた各類本の成立の期間は、以下のとおりであった。

第一類本：建治二年（一二七六）十一月十一日

文安五年（一四四八）八月

第二類本：貞和三年（一三四七）三月二十九日

延徳二年（一四九〇）十月二十八日

第三類本：正和元年（一三二二）三月二十八日

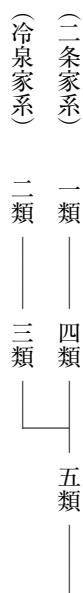
明応二年（一四九三）

第四類本：建治二年（一二七六）十一月十一日

建武五年（一三三八）閏七月十三日

第五類本：大永二年（一五二二）十一月下旬

これを平均し略本全体の成立を考えてみても、あまり意味はない。それよりも、各類本の系譜を加味して考えてゆく方が、実態の把握に近づきやすいと思われる。途中でも若干述べてきたところであるが、改めて各類本の系脈に思いを馳せて整理してみると、以下のように図示できるであろう。



一類本の「主ある詞」に作者を添えた形と、二類本の制詞歌に作者を付した形態の本の、先後を確定することは難しい。両者とも、広本（甲本）の転写本の段階においても現れているほどだから、自然の勢いとして甲本「主あることば」から独立してすぐに生じしうべき形態である。広本が流布しはじめたごく初期に、ともに成立していたと思われる。三類本の「不可好詠詞」と四類本の「先達加難詞」の集成も、歌人や連歌師たちの詞への関心が高まり、作者層が拡大するにつれて、付合の参考書として、あるいは直接的なマニユアルとして、需要が増大していったはずだから、これもそれほどの時間をおくことなく始まり、増補と書写が繰り返されていったと思われる。そうした中で、四類本の「先達加難詞」の集成が、建武五年為親以前に遡ることが明らかとなったことは、甚だ注目されるところである。すでに述べたことであるが、建武五年といえ、甲本「詠歌一体」もまだ初期の段階で、写本として世に存在していたのは、建治二年の為氏奥書本と為秀若年の筆になる河野本の二本のみであって、冷泉家時雨亭文庫現蔵『詠歌一体』もまだ出現する以前であった。四類本の成立は、甲本「詠歌一体」と踵を接するようにして始まっていたのであった。

本稿で時々指摘してきた略本詠歌一体の奥書によれば、建

武五年為親の時代以後においても、堯孝や正徹・正広の時代にも、歌人・連歌師たちの間に広く流布し、転訛しつつあったようである。『正徹物語』や『東野州聞書』には「制の詞」に言及したところがあるし、もう一時代前の頼阿も『井蛙抄』（巻第三）の冒頭で、次のように述べている。

代々宗匠不庶幾之由被申たる詞どもあり。あるひは優美ならざるにより、或は義理のたがひたるにより、あるひは詞のあしきにはあらねども、時俗のきほひよむによりてとどめられたるあり。しかるを今の後学末生、きんせいの詞と名付けて書きもちて侍れども、つやつやそのいはれをわきまへず。仏の制戒にも通局をあかし、法曹の律にも軽重をたてたり。その源をわきまへずは、いかでかあやまりなからん。よて先達のいましめられたる濫觴、そのち代々の用捨、管見のおよぶところ少々これをするす。是につきてよくよく了見をくはへて、これをまもりこれをつつしむべし。

ここで頼阿が「今の後学末生きんせいの詞と名付けて書きもちて」いたというのは、まさしくこの略本系の諸本だったに違いないのである。

九 おわりに

略本『詠歌一体』は、歌書というには余りに片々たる存在であるけれども、中世和歌の一つの特質と見られる「制詞」意識の萌芽とその展開のあとをたどり、実際にどのようにに利活用されていたかを想見するための、有用かつ貴重な資料となるはずである。

【注】

- (1) 久曾神昇編『日本歌学大系』第三卷「八雲口伝（詠歌一体）」解題（風間書房、昭和三十一年十一月）。
- (2) 金子金治郎「宗長の『老談』の成立」（『中世文芸』第三十号、昭和三十九年十一月）。
- (3) 井上宗雄・佐藤恒雄「『先達加難詞』の一本について——詠歌一体乙本との関係——」（『和歌史研究会会報』第二十九号、昭和四十三年三月）。
- (4) ②④中田本には、大永二年堯空奥書の後、「以中院中納言殿真筆本一校也」とある。「中院中納言殿」は中院通勝で、その「真筆本」とは、②⑥本か③④本かであろう。
- (5) ②④河野本には、堯空奥書の後、次のとおりある。
此宅冊三条西家（宰相中将実稱朝臣）借求之／
一字不違令模写畢世流布之／本多誤亦有之歟、逍遙老槐／
入道奥書有之上者三条家本／
尤可為証本者也／

宝暦二年初冬中旬 戸部尚書（花押）

実稱は、三条西家の当主で、参議右中将二六歳。戸部尚書は前権中納言従二位民部卿藤原宗家（下冷泉）五一歳である。

(6) ③〇本には、也足子奥書のあとに、

天和二年四月三日夜於灯前令書写之訖／藤公前と書写奥書があり、③①本には、さらに公前奥に続けて、風早従三位公雄卿御所持公前卿（後改公長）／御自筆正本奉借請書写之耳／宝暦五年十一月五日 鷹見保具とある。

③③高松宮本には、也足奥書に続けて次のとおりある。右詠歌一体者也足之真筆、中院前重相道茂卿之本類／請借而遂書写校合畢。不違一字為備從鑑者也／右之本者四半九行也。今此小冊雖為十二行之字数／如何令模写畢

天和三年禊月下旬 八座羽林実（花押）

書写者は、参議従三位左中将清水谷実業三六歳である。

(7)

③⑤神宮文庫本には、さらに以下の書写奥書がある。

斯一冊烏丸黄門資慶卿本也／某直々申上遂恩借不違一字令書写者也 中院也足子素然御／自筆本也誠可謂正本而已／

戊戌仲春二日 盛庸書

③⑥鶴舞図書館本は、天正十九年也足子奥書のあとに、次の奥書がある。

右者故大納言資慶卿以御自筆本／写之者也／源頼永詠歌一体源頼永以伝本写之畢／

元禄十五年季穉 源充長 朱印

右者源充長以伝本不違一字写之者也／

宝永四年丁亥終夏上旬 源重共

③⑦伊達文庫本は、天正十九年也足子奥書のあとに、以下の奥書がある。

右詠歌一体（為家卿作）以也足軒（中納言入道通勝卿）／

自筆本不違一字書校之、尤証本也／

享保十年六月下瀬 権大納言光榮

斯一冊者中院通枝卿本／所写也／

寛延第三十一月廿一日 平入道兼誼

③⑧池田文庫本は、天正十九年也足子奥書まで。伝烏丸光雄卿写本という。

(8)

④③中田本には、

寛保二年四月中旬春原成充写

④⑥藤本文庫本には、

文化十一甲戌のとし秋九月朔日執筆以須奥に写筆 庸之（花押）

と書写奥書がある。

⑤③彰考館文庫本は、巻頭の制詞歌なく、前文も後文もない「主ある詞」四三語を列記する。「先達加難詞」も表題なく、詞を連記するのみ。「一つ書き」も若干少なく三三条。最末に表題もないまま制詞歌四二首を連記する（最初の「主ある詞」の補いか）。そして、奥には、「右故大納言資慶卿以御自筆之／本写之者也」とある。

(9)

⑤④井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』（明治書院、昭和四十七年十二月。改訂新版、昭和六十二年十二月）。『和歌大辞典』（明治書院、昭和六十一年三月）「尊俊」（井上宗雄）。

Several Books of Simplified Scripts of
“Eika Ittei” and the Establishment

Tsuneo SATO

Abstract

Compiling several legendary books with Simple Scripts, in a simplified form of “Integration of Composing Poems,” classified them into five categories, it is sought each correlations and issues of establishment.